

# 小 論 文

2020 年度（令和 2 年度）

## 入 学 試 験 問 題

受 験 番 号	
---------	--

### 注 意 事 項

- (1) 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- (2) この問題冊子は 3 ページあります。問題は 1 問です。  
試験中に、問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れなどに気づいた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
- (3) 問題冊子の表紙の受験番号欄に受験番号を記入してください。
- (4) 解答用紙の受験番号欄に受験番号を記入してください。
- (5) 問題冊子のどのページも切り離してはいけません。
- (6) 辞書機能や計算機能、通信機能などをもつ機器等の使用は禁止します。使用している場合は不正行為とみなします。
- (7) 試験終了後、解答用紙はもちろん、問題冊子も持ち帰ってはいけません。

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

情報化社会の深い闇を解明するヒントは、20世紀のアメリカの通信工学者クロード・エルウッド・シャノンらが築き上げた情報理論に見られます。情報理論とは、通信(コミュニケーション)を行う際、信号を正確に伝達するための理論です。情報機器がネットワークを介して繋がる情報化社会は、信号を正確に伝えられなければ成り立ちません。情報理論は、現代社会を支える根本原理とも言えます。一方、シャノンは、数学者ワレン・ウィーバーとの共著『通信の数学的理論』の中で、情報理論は、コミュニケーションのうちの極一部にのみフォーカスを当てているということを指摘しています。馬の耳に念仏を正確に唱えても、馬は、念仏の意味を何一つ理解できません。念仏は、馬にとっては「記号」に過ぎず、それだけでは、「記号」の「意味」は伝わりません。コミュニケーションは、相手に対して、「記号」を介して「意味」を伝えることではじめて、相手の行為(振る舞い)に影響を与えることができます。「記号」の正確性のみを扱う情報理論だけでは、私たち人間社会のコミュニケーションを説明することはできないのです。

確かに、記号化された社会というものは、公平で効率的な、ある意味で安全で安心な社会であると言えます。あらゆるものを記号化し、数値化していくことで、同じものかどうかということのを定量化して計算することができます。記号化は、17世紀以降の近代科学を支える基本概念の一つであるとも言えます。近代科学が生まれてから、それまで「手づくり」であった伝統工芸は、「機械化」によって「大量生産」することが可能になりました。それによって、誰もが安価で同一の製品を手にすることができるようになりました。つまり、誰もが同じくらい豊かな暮らしができるようになったのです。これを象徴しているのが戦後日本であると言えるでしょう。国全体が豊かになるにしたがって、誰もが三種の神器と呼ばれる電化製品に象徴される豊かな生活を手にし、「一億総中流社会」と言われるまでに社会が成熟しました。近代科学は、誰もが同じように豊かな生活を手に入れることを可能にしたのです。しかしながら、誰もが同じような生活をするということは、同じような生き方をするということでもあります。誰もが同様に学校教育を受け、その中でペーパーテストによる競争があり、同じくらい優秀な成績を取めることが求められ、卒業後は同じような「社会人」となるこ

とが求められます。同じくらい豊かな生活を手にするということは、判で押したような同じ人材になることが求められるということでもあります。

そして、情報化社会は、こうした同じような生き方をすることを益々加速させます。誰もが同じようなスマートフォンをもち、同じSNSで、同じ時間に同じようなコミュニケーションを取る。こうした生活リズムに乗り遅れると、情報の流れに乗り遅れる。一度、情報の流れに乗り遅れると、社会から脱落し、職を得ることも困難になるのではないかという強迫観念にとらわれるため、たとえ何らかの違和感があったとしても、こうした同じような生活リズムから逃れることは、そう容易ではありません。日本航空の入社式の風景をレポートした2010年9月16日付の日本経済新聞夕刊記事「就職氷河期、個性は封印」では、まるで制服であるかのように同じようなダークスーツを身にまとい、髪型や靴や、手の組み方まで同じように揃えた「無個性」な新入社員が紹介され、1986年の個性豊かな衣服や靴を選んでいた頃の新入社員の様子と比較されています。勿論、服装だけで「無個性」と断言するのは偏見ですが、彼ら彼女らが、同一の就職サイトから情報収集をし、同一のフォーマットの履歴書を提出し、同一のルールに基づく採用試験を受けているということは事実です。現代の情報化社会においては、一人ひとりの人間が、まるで機械の中の一つの歯車のように、代替可能で同じような部品となることを求められるのです。

現代の情報化社会は、たとえ、公平で効率的であったとしても、およそ、人間らしい社会であるとは言えません。筆者は、これからの時代の羅針盤は、私たち人間や生き物の持つ「生命知」にあると考えています。生き物は、常に変化する環境に置かれ、いつ外敵に襲われるともわからない、そして、いつ餌にありついてもわからない中で、ときには他の生き物と共存しながら、またときには他の生き物と対立しながら、即興劇的に、自らの行動を変化させ、実世界を生き抜くという「生命知」を持ちます。古代ギリシャの哲学者ソクラテスが遺した言葉「世界を動かさんと欲するものは、まず自ら動くべし」に見られる通り、自己の行動を変化させることによって、自己と他者との間に関係が作られ、「即興劇的に振る舞うことによって、それまで「記号」に過ぎなかった自分と他人に、「意味」が与えられ、「即興劇」が持続していきます。「意味」というものは、「まず自ら動く」ことによってはじめて生まれるものです。こうした自ら場に与える振る舞いを、〈いのち〉を捉える哲学を提唱する東京大学名誉教授の清

水博は、「与贈」と表現し、それによって「即興劇」が持続していく能動的な活<sup>はたら</sup>きを、「いのちの与贈循環」と表現しています。

「記号」に「意味」を与える「生命知」と同様の考え方は、多くの分野に見ることができ  
(1)  
ます。

(松田雄馬「人工知能はなぜ椅子に座れないのか」)

問 下線部(1)について、医学の分野ではどのようなことが考えられるか、800字以内で書きなさい。

*Windom*